

九条入道將軍への返状

底 本 井川定慶編『法然上人伝全集』所収

「法然上人行状絵図」第四十七卷

(昭和五十三年六月 三版本。)

九条入道將軍への返状

九条の入道將軍の御尋につきて、善恵房しるし申されける状云、三心具足の念仏は、仏の願に相應する故に、かならず撰取の利益をかうぶる。この撰取の故を積するに、親縁近縁増上縁の三の心あり。

一に親縁といふは、この鈍根無智の機をもらさず、撰取すべきいはれより、正覚を成し給ふ無碍光の体なる故に、かの仏の三業の功德我等が煩惱悪業の三業にへだつるところなし。故に称すればぎゝ給ひ、礼すれば見給ひ、念ずればしり給といへり。是即^①行者の心の、善悪をかへりみず、たのむ心ふかくなりぬれば、決定往生すべき称名ときゝ給ひ、決定往生すべき礼拝と見給ひ、決定往生すべき憶念としり給ふ也。されば彼此三業不相捨離と積給へり。

① 即「則」

二に近縁といふは、したしき道理きはまりぬれば、我等が身口意業を、仏のしり給のみにあらず、又仏の三業をしるべきいはれあるゆへに、みんなとおもへばすなはちみえ給也。もしは夢のうち、乃至臨終にあらはれ給ふ。みなこの心也。

三に増上縁といふは、かみの二縁の、他力にて成ずるいはれをあらはず也。衆生称念、即除多劫罪、命欲終時、仏与聖衆、自来迎接、諸邪業繫、無能碍者、故名増上縁と積給へる。衆生称念、即除多劫罪は、かみの親縁の体、他力にて成ずるところを、積しあらはず詞也。命欲終時、仏与聖衆、乃至無碍者といへるは、近縁の見仏、他力にて成ずべき道理を、積しあらはず詞也。故にこの縁は、他力の体をあらはずを詮とす。かくのごとく心得れば、親縁によりて称念すれば、無量劫のつみ滅する道理あるをもて、行者の心これにもよをされて、悪をおそれ、悪をとゞむる、この心いよくおこたらず、又近縁によりて、凡夫のつたなき眼に報仏をみる大善根き

註 1 定善義

第九真身觀の積文

「衆生称念スレバ、即チ多劫ノ罪ヲ除ク命終ラント欲スル時、仏ハ聖衆ト与ニ自来リテ迎接シタマフ諸ノ邪業繫能ク礙ル者ナン故ニ増上縁ト名ク」

はまりぬれば、この功力にもよをされて、已作の善には、ふかく随喜の心をおこし、未作の善においては、修習のおもひ増進するが故に、増上縁といふ也。然則三心具足する故に、帰命の心をこる、これを南無といひ、三縁そなはれば、無碍光の体、我等が罪惡の身に、へだつるところなき功德を、阿弥陀仏といふ也。故に南無阿弥陀仏と称する、この六字の名号に、一代の仏教の本意も、ことごとくにおさまり、十方三世の化物もしかしながらそなはるが故に、念々不捨者、是名正定之業、順彼仏願故といはれて南無阿弥陀仏のほかに、又余事なきなり。爰以積には、自余衆行、雖名是善、若比念仏者、全非比校也、是故諸經中、処々広讚念仏功能、如無量壽經四十八願中、唯明專念弥陀名号得生、又如弥陀經中、一日七日、專念弥陀名号得生、又十方恒沙諸仏、証誠不虛也、又此經定散文中、唯標專念名号得生、此例非一也、広願念仏三昧、竟と判給へり。かくのごとく、三心三縁、重々に分別すれば、

註 1

定善義

第九真身觀の釈文
 「自余ノ衆行モ是レ善ト名クト雖モ若シ念仏ニ比スレハ全ク比校ニ非ズ、是ノ故ニ諸經ノ中、処処ニ広ク念仏ノ功能ヲ讚ス。無量壽經ノ四十八願ノ中ノ如キ唯、專ラ弥陀ノ名号ヲ念ジテ生ズルコトヲ得ルコトヲ明ス。又弥陀經ノ中ノ如キ一日七日專ラ弥陀ノ名号ヲ念ジテ生ズルコトヲ得。又十方恒沙ノ諸仏ハ不虛ヲ証誠シタマフ。又、此ノ經ノ定散ノ文ノ中ニ唯、專ラ名号ヲ念ジテ生ズルコトヲ得ルコトヲ標ス。此ノ例ニ非ズ。広ク念仏三昧ヲ顯ハン竟ス。」

あやまるところなくして、この愚悪の凡夫、直に報土の往生をとぐる也。しかるにこの悪人へだてずといふ、一分の道理をとりて、悪は憚べからずといふ邪見をおこし、悪苦しからずといふ僻見あり。これをのれが悪のとどめがたきによりて、枉ていまの教の所談と称する事、はなだ太もてしかるべからず。垢障の機のうちへに、南無阿弥陀仏の行成ずといへども、先世の罪徳、臨終までつきずして、苦にせめらるといへども、其心みだれずば往生をとぐるゆへに、観經の下品下生をは、此人苦逼、不遑念仏、善友告言、汝若不能念者、応称無量寿仏と説給へり。この文に付ておのれが悪のとどめがたきによりて、臨終狂乱すべきゆへに、狂乱すとも往生すといふ輩あるか。是則みづからあやまるのみにあらず。又他をあやまつ、そのとがはなはだふかし。この品の人の往生をば、ことさら臨終正念、金花來応と積する也。苦は先世の因にむくひたる果報のすがた也。狂乱は当來の果をあらはず悪業のかたち也。なんぞ因果を分別せずして、

かくのごときの説をいたすやと記給へり。